

(本文・訓読ともに新釈漢文大系『白氏文集(三三)』三七四～三七五頁より引用する)(傍線筆者)
この白詩の十一・十二句「可能勝賈誼／猶自滯長沙」の表現には賈誼の別の故事が踏まえられている。それは先に挙げた『史記』「屈原賈生列傳第二十四」の次の一文である。

後歲餘、賈生微見。孝文帝方受釐。坐宣室。上因感鬼神事、而問鬼神之本。賈生因具道所以然之狀。至夜半、文帝前席。既罷曰。吾久不見賈生。自以爲過之。今不及也。居頃之、拜賈生爲梁懷王太傅。

(そののち一年余で、賈生は都へよばれた。文帝はちようど祭りの釐ひらを受けて、宮中の宣室にすわっていた。帝は鬼神につき感じたことがあったため、鬼神の本質を質問した。賈生はそのおり鬼神がなぜそのようなかありさまをくわしく述べて、夜半に達し、文帝は膝を乗り出して傾聴した。話がおわると帝は「わしは久しく賈生にあわずにいて、自分ではあれよりも〔知識が〕上だと思っていた。今やはり及ばぬとわかった」と言い、ほどなく、賈生を梁の懷王の太傅に親任した。)

(本文は『史記會注考證』本に拠り、解釈は、岩波文庫『史記列伝二』に拠った)(傍線筆者)
とあるように、賈誼が自らの不遇を「鵬鳥賦一首并序」に託した作品を詠んでから一年余で文帝により召し還されているのである。白居易はこの故事を踏まえて「自分は賈誼と違って長安に戻れず、まだ江州に居続けなければならぬ」と詠う。

ここで道真の十二句目「優於誼舍在長沙」に目を移すとどうなるか。

白居易が「はたして今の自分が、あの賈誼より優っていると言えようか。(いや言えるはずがないではないか)」と「可能優」(「可」は「豈」の俗語)という表現で直截に反問するのに対して道真は「賈誼の長沙の時の住まい